



屋根裏部屋マダム、パリ郊外の素敵なマダム etc.  
フランス・マダムのキッチン拝見!

別冊付録 2022年  
華やかなアレンジで大好評!  
花のカレンダー

Flower Gift Calendar

Vol.14 セゾン・ド・コ

エリコ流クローゼットルーム  
私のときめく  
秋冬スタイル

私のキッチンが  
オリジナ  
ショッピング力  
完

# 中村江里子のデイリー・スタイル

Saison d'Eriko



EUSOSHA M

## Jardin et Terrasse

お天気のよい日は庭と  
テラスでおもてなし

シャロンさんが暮らすのはパリから西へ車で1時間少しドライブしたノルマンディー地方の入り口。画家クロード・モネが後半生をかけて築きあげ、そこでたくさんの名作を生んだ庭園と家があることで知られるジヴェルニーからもそう遠くなじところにあります。私たちが訪ねた日は、幸いとてもよいお天気で、門に入るなりみずみずしい緑が光に

ノルマンディーの自然あふれる  
美しいカントリーライフ

シャツドレス、素足の一部のようなローヒールのシューズ。シャロンさんのアースカラーラのカラーコーディネートはいかにもナチュラルですが、彼女がひとたび微笑むと、内側からにじみ出てくる華があります。開口一番、「英語、それともフランス語がいいかしら?」と、彼女いかにもフランスのマダムという風情のシャロンさんですが、じつは英国人。フランス人の夫と恋に落ちたのと同時に、フランスそのものの豊

La cuisine à la française

フランス・マダムの  
キッチン拝見!



20年以上かけて  
丹精した庭の花と好きな  
絵があるキッチンです

Sharon SANTONI

シャロン・サントニ

[ age 62 ]

02



英国生まれ。20代始めの南仏留学で知り合ったフランス人男性と結婚して以来、人生の半分以上をフランスで過ごす。4人の子育てに専念したあと一念発起してブログ開始。ノルマンディー地方の自宅での暮らしをはじめ、フランスのアール・ド・ヴィーグルを紹介する発信が人気を呼び、書籍の出版や雑誌の発行、そして物販、オリジナルな旅のオーガナイズなど、事業を拡大して活躍中。



1.に守られるようにしてたたずむ家。2.昔は納屋として使われていた建物の壁にもお気に入りのバラがたわわに花をつけている。キッチンやダイニング、サロンを飾るにはこうして一枝ずつ丁寧に選んで。3.愛犬と一緒に庭を一回りしてバスケットいっぱいの花を摘んだシャロンさん。

子どもを育てるのと同じように  
歳月をかけて育んだ住まい



4. テラスのテーブルをサロンから見たところ。  
つるバラがまるで額縁のよう。5. テラスのテーブルの花飾り。いろいろな品種のバラを一輪ずつリキュールグラスに入れて、一人ひとりの席の前に置いて。6. ウエルカムコーヒー。器はさまざまだが、全体として統一感があるのがシャロンさん流。

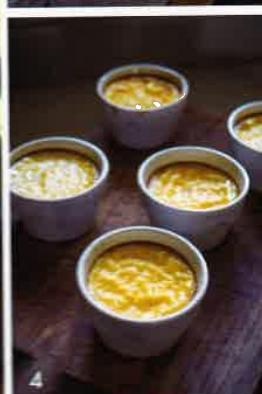
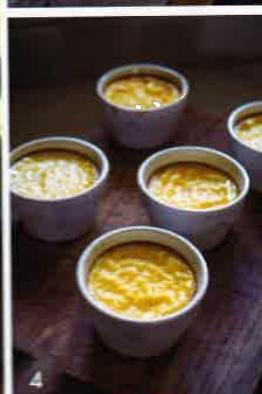
寝椅子のエリア。奥には菜園も。「いちご、フランボワーズ、りんご、プラム、ハーブ、トマト、じゃがいも、アーティチョーク、ルバーブ……」。シャロンさんの口から次々に繰り出す作物の名前を聞いていると、この家のテーブルの季節ごとの彩りが目に浮かぶよう。キッチンでフツフツと音を立てて煮えるジャムの香りまで伝わってきそうな気がします。

彼女のおもてなしはまず、お宅の前の気持ちのよいテラスから。白いパラソルの下、籐椅子に落ち着くと、キッチンから香りのよいコーヒーが運ばれてきました。1997年から住んでいるというお宅は、この土地の昔ながらの造りの家で、壁をつたつバラをはじめ、豊かな花々に囲まれています。「この家を買ったとき、バラは赤と黄色だけで、私が好きな色ではなかったので、少しずつ自分の好みの品種に植え替えていった」と、シャロンさん。

20年以上かけて丹精してきた庭はどこを切り取っても絵になるような夢の世界で、それは愛犬が思いつ切り駆け抜けているける距離にまで広がっています。芝生を歩いてゆくと、左には緑の垣根に守られたブールド



5



6

*Cuisine*  
間取りもテーブルも  
好みの設計で

1. シャロンさんの構想を村の木工職人さんが形にしてくれたというキッチン。中央のテーブルには食器やカトラリーの収納機能も。2-3. この日のランチのメインディッシュはチキン。オリーブオイルをかけたミニトマトもオーブンで焼いて付け合わせに。4. みんなが大好きなプリンも完成! 5. 絵画の収集は夫婦共通の趣味。食材がテーマになった絵をキッチンに。6. 窓辺は庭の可憐な花たちのステージ。



### *Salle à manger*

花とろうそくと暖炉で  
心も温められる時間

7. 庭でその日いちばん心にとまつた花を主役にする花飾り。この日は、アブラハム・ダービーという名前の大輪のバラ。8. スープの器は「ジアン」の最近のシリーズ、それをするお皿はアンティーク。カトラリー、グラス、リネンも新旧自在の取り合せで、温かみのある世界観に。9. 椅子とカーテンのファブリックは「アントワネット・ボワッソン」。落ち着いた色調の内装に花が映える。

## *Salon*

家族のヒストリーを  
感じる穏やかな場所



1. 画家レミー・ペッシュの作品がお出迎え。2・4. それぞれに思い出のある絵やオブジェを飾ったサロンの一角。庭の花たちがみずみずしい生命感を添えている。3. シャロンさん主宰の雑誌『My French Country Home』。フランス各地に取材した記事など盛りだくさんで、隔月の発行。5. 2017年からはシャロンさんセレクトのフランスの素敵なものがギュッと詰まった玉手箱『My French Country Home Box』の販売開始。3か月ごとに内容が刷新され、サイトからのオーダーで世界各地に届けられる。

<https://myfrenchcountryhomebox.com>



暖炉の火を眺めながらのティータイム。若き夫妻が南仏で一緒に暮らし始めるのに必要な食卓を探しにいったアンティーク店で、テーブルを買うかわりにこの絵に一目惚れして持ち帰ったという思い出のある絵が飾られています。

2009年の大晦日のテーブルで、シャンパンバーのグラスを掲げながら、シャロンさんは家族に宣言をしました。「来年からは生き方を変える」と。およそ20年間、4人の子育てに全力で取り組み、末っ子にもあまり手がからなくなつたタイミングでした。2か月後にはブログを開設。フランスのアール・ド・ヴィエヴルを英語で発信するブログ「My French Country Home」はすぐにアメリカ人のファンを獲得し、14年には本を出版。そして19年にはブログと同名の雑誌を創刊するまでになりました。美しいもの、素敵なものへの感応を伝えたい、分かち合いたいという気持ちが、彼女の子育て後の人生をさらに実り多きものにしているのです。

シャロンさんのお宅や暮らしぶりを垣間見ると、「ART DE VIE VRÉ（アール・ド・ヴィエヴル）」という言葉が浮かびます。辞書には「生きる術、知恵、作法」とあります。生活のさまざまなモノやコトの美、といった広がりをもつて使われる」との多い言葉です。シャロンさんはまさにそれを体現し、家族で楽しむだけでなく広く世界の人々と分かち合っています。

## 人生の円熟期を生きる